

第32号 華山会報

平成26年4月11日

公益財団法人華山会

渡辺華山と江川坦庵

静岡県伊豆の国市文化振興課学芸員 工藤 雄一郎



作家石川淳が、昭和16年に発表した歴史読物『渡辺華山』の中に、次のような一節があります。そして、この政治への乗入につき、いつか現実の強権の前に尚齒会をつれ出して、まともにその値打を見せつけなければすまぬ塩梅に、会にはたらきかけ、会の頭脳と交流し、会の運動に筋金を入れて来るところの、一つの力があつた。江川英龍である。

〔渡辺華山〕 筑摩書房『石川淳全集』第11巻所収 ※原文旧仮名遣い

これは、尚齒会と江川坦庵（太郎左衛門英龍 一八〇一―一五五）との関係について述べた文章ですが、そのまま華山と坦庵の関係を表すものとして読んでも、間然するところがありません。

江川家は、清和源氏の流れをくむ、平安時代末期から続く武家です。江戸時代には伊豆・相模・武蔵の幕府直轄地を管轄する「葦山代官」の職を世襲しました。その江川家の第36代当主である江川坦庵は、優秀な代官であるとともに、幕末日本の海防政策を担った人物としても知られています。江戸湾防備のための台場の築造、台場に配備する鉄製砲鑄造のための反射炉建設、西洋式帆船の建造。海防政策における坦庵の業績は、嘉永6年（一八五三）のペリー艦隊来航を契機に結実していきますが、その基礎となる情報や考え方は、華山や蘭学者たちとの交流を通じて築かれていったものでした。

そんな坦庵が、初めて華山と正式な対面を果たしたのは、天保8年（一八三七）のことでした。対面後、10月29日付で華山が坦庵に送った書状が、公益財団法人江川文庫に残されています。その書状の中で華山は、貧苦の中にあつた自らの生い立ちや、生活のために画業に打ち込んだことを語っています。初対面にして、お互いに認め合ったからこそ、華山も自分の身上を率直に語っておきたいと思つたのではないのでしょうか。

坦庵もまた、華山に囑望するところ大でした。華山に対して師弟の礼をとり、様々な助言を得るとともに、幕府への建議に用いるため、外国の情報をまとめてくれるよう依頼しています。華山はこの依頼に応えて「諸国建地草図」と「西洋事情書」を執筆しました。他にも、天保9年に目付鳥居耀蔵を正使、江川坦庵を副使として行われた江戸湾の備場見分の際、坦庵の依頼を受けて、内田弥太郎・奥村喜三郎ら測量術に通じた人物を推薦しています。

このように、華山と坦庵の間には、世界情勢に関する認識を共有しつつ、協力し合う信頼関係が築かれていたのです。まさに「理想が一致すると、相当な人物どうしの間では、いかにすらすらと協力が成り立つかという実例である」（前出『渡辺華山』より）といったところでしょう。残念ながら華山は、蛮社の獄によって逮捕され、国許に蟄居、最終的には自刃という悲劇的な結末を迎えることとなってしまいましたが、その学識と思想は、江川坦庵を通じて、やがて海防政策など現実の事業に活かされていったのです。

なお、昨年6月、公益財団法人江川文庫の所蔵資料の内、坦庵宛の華山の書状や「西洋事情書」の原稿などを含む3万8千点余が、国の重要文化財に指定されました。

身近なふるさと学習への対応

田原市教育委員会委員長

渡邊峰男

平成二十二年三月に策定した田原市教育振興基本計画の基本理念に「ふるさとに学び 人がつなぐ 田原の人づくり」と記されています。この計画を進めていくため、平成二十三年三月には、『田原の文化財ガイドⅡふるさとの偉人を訪ねる』田原を築いた人びと』が出版されました。地域のふるさと学習の手助けとなる十九人を紹介し、その中に私が住む野田校区では、村民教育をつうじて農村改革を行った指導者、河合為治郎（一八五〇～一九三二）が取り上げられています。また、人物一覧の中には、河合清右衛門（？～一六七三）・藤江弥七郎（一八三四～一九一一）・山田寿二（一八八八～一九六六）の三人が紹介されました。山田寿二さんは、漁船舶用電気機器の研究開発で、海運、漁業の発展に寄与しました。出身地の野田小学校に楽器や備品を寄贈し、図書室及び山田文庫を設立し、図書室には山田

氏の胸像が置かれています。その後、校区でも河合登さんが三十六年にわたり学校図書室の書架や本の寄贈を続けてくださり、河合文庫と名付けられました。野田の子どもたちは良い本を読み、立派な人になってほしいと願い、二人の先輩たちが続けられた活動です。野田校区には、江戸時代から昭和三十年（一九五五）以前の多くの行政文書資料が、野田村から田原町に合併した後も残っていました。最近、田原市へ移管されました。昭和の合併に続き、平成の大合併が行われたことで、これらの文書資料も歴史を振り返るためにこれから活用される時代が来ます。

また、今年、市制十周年を迎えた田原市で、二月十四・十五日に嚶鳴教育フォーラム「田原が開催されました。嚶鳴フォーラムは、「ふるさとの先人を活かしたまちづくり、人づくり、心そだてに取り組んでいる自治体が力を合わせ、その取り組みを全国に情報として発信するとともに、切磋琢磨し、先人の志と行動力に学ぶ元気な地方の交流を図ることを目的」としているもので、今年は第七回で、昨秋開催される予定だったものが台風の影響により、月を変え、十一市町の教育関係者が参加し、初日には伊良湖ビューホテルを会場に、今年生誕二百五十年を迎える伊良湖の漁夫歌人糟谷磯丸についての講演、二日目の会場、田原中部小学校では、昭和初期から続けられている田原中部小学校の児童による歌唱劇「華山劇」を鑑賞していただきました。作家童門冬二氏による記念講演「渡辺華山が語るもの」もあり、児童や保護者の方を含めた約三百人の参加者が田原の先人、渡辺華山をより深く知ることができたことは、これからのふるさと学習と生涯学習につながっていくのだと思います。

題字「華山会報」元華山会理事	故小澤耕一氏
P ① 渡辺華山と江川坦庵	工藤雄一郎
P ② 身近なふるさと学習への対応	渡邊峰男
目次	
P ③ 画家渡辺華山の心象	
P ④ 渡辺華山『毛武游記』⑨	
P ⑧ 博物館所蔵品から	渡辺華山筆
	『客生掌記（天保九年）』⑧
P ⑫ 研修視察	
P ⑭ 華山の田原行（十六）	
P ⑯ 公益財団法人華山会	田原市博物館
	田原市渥美郷土資料館
	からご案内

画家渡辺華山の心象

蠅螂図扇面 個人蔵

天保年間

紙本着色

縦二一・六cm×横四九・一cm



画面左に「洋人の画は写生の^{いちず}一途に就き、之を専^{もつ}にす。故に其象形の妙は、吾の能くせざる所なり、因て之に倣ふ」とある。田原塾居中の華山から江戸にいた椿山に与えた絵画論の質疑応答集である『絵事御返事』（重要文化財渡辺華山関係資料のうち、田原市博物館蔵）の中で「写生切近なれば、俗套に陥り候。」と述べている。華山は、西洋画の「象形の妙」なる物の形を写し取り、図化するというリアリズムに感服しながらも、絵画では姿・形を似せるといふ写生のみではなく、対象の意、すなわち気韻を移すことが重要である、といった理念を持っていた。

カマキリは肉食で、常に餌取りの対象となるべき生き物として動く小虫を探す。天保十二年四月十六日付の華山から椿山に宛てた書簡の中で、蜜社の獄で捕えられたことを振り返り、「一体一昨年、春より画をかき申さず候て、後に蠅螂の窺いあ

るも知らず、本意を達し申度、灯心にて富士を動す事を願ひ候事故」と記している。「蠅螂の窺い」という言葉は、カマキリが蝉を食べようとしている時、その背後に黄雀がいて、今まさに狙われていることで、目先の利益に目がくらんで、背後から敵が迫ってくることを知らないでいるという例えである。



レーゼル『昆虫書』

ら狙われている日本をダブらせた隠喩的絵画に至る構図の先駆けが窺い知られる。

最晩年八月に完成させた作品と考えられる「虫魚帖」（重要文化財、岡田美術館蔵）の第四図「越瓜拒斧図」には、瓜の横で身構えるカマキリの姿が描かれる。瓜の花に寄ってくる蝶などを待っているのである。自然界に身を置く昆虫の弱肉強食の捕食関係を描いた作品の一つである。この図に添えられた明、朱之蕃（？〜一六二四）の詩は、一部、欠落しているが、「頭を昂ぐれば、雙眼林に映じて明らかに会に出でて車に当れば、臂を奮って行く。静黙関するに非ず。能く勇を養い羶羞（なまぐさいごちそう）を慕いて蟻と衡を争う。」とある。瓜の上に群がる蟻はアブラムシが分泌する甘い露を求め、その甘露ほしさにアブラムシを食べるテントウムシを襲ったりする。

田原市博物館副館長学芸員

鈴木利昌



要害山

渡辺崋山『毛武游記』⑨

研究会員

加藤克己

此庵に人あるやうに覚ゆれば、そのゆへよしを
とはんと行見るに、老さらほひたる翁なり。い
と薄く破れたる衣をひきかつき、臥したるは此
妻なりける。かしらの程ハ、いとおどろくし
く見るもおそろし。何を世渡るなりわひとせる
や、たゞ此堂守りのあらざれば、すみすてし庵
をたのミ来つるにや、朝夕の煙立る得ならぬも
の、かゝる老にけるまで夫婦むつまじう暮し
けん。見む人のこゝろの外なるをや。

天保二年（一八三二）十月十六日続き

この庵に人がいるような気配がしたので、その
あたりの事情を聞こうと思い、行ってみると、老
衰した翁である。たいへん薄くなった破れた衣を
かぶって、横になつて居るのはこの男の妻であろ
う。頭を見ると、髪の毛がたいへん乱れていて、
見るのも恐ろしいほどだ。何を職業として生活し
ているのだろうか。ただ、この堂を守る人がいな
いので、住み捨てられた庵を頼りにやってきたの
であろうか。朝夕の食事にも事欠くものの、この
ように老いてしまふまで夫婦仲良く暮らしている
のだ。見る人にとって全く思いがけないことであ
るだろう。

※ 朝夕の煙立る得ならぬ 朝夕の食事にも事欠く。

※ こゝろの外なる 思いがけないこと。

扱此甲ハいかになり行しやととふに、いかにな
りけるやしらず、むかし社の裏に侍る石の下に

埋たるよしハ聞けど、此小社の内にありしを聞
ずといふ。何ぞ靈宝侍らば見といふに、菓子ハ
される、あやにくの事なりといふ。打わらひて
山下に至る。

「さてこの甲はどうなりましたか」と聞くと、
「どのようになつたか知りません。昔、社の裏に
ある石の下に埋めたということは聞きました。が、
この小社の中にあるとは聞いていません」という。
「何か靈宝があれば見せてほしい」というと、「菓
子は切れています。あいにくの事です」と答える。
思わず笑つてしまい、山（要害山）を下つた。

※ あやにく あいにく。

要害山、属高津戸。麓有河、渡瀬源流。（空
字）堀河院、御宇山田七郎平吉之居之。至孫
築（筑）後守則之為桐生国綱。時寛（観）
応二年云。天正五年里見随見扱上杉謙信乞
此地許之。加以伊勢崎。同九月新田（空字）
遣由良国繁拔之。随見自殺。

要害山は高津戸に属している。麓に川があり、
渡良瀬川の源流である。（空字）堀河天皇の御代
に山田七郎平吉之がここに住んでいた。その子孫
の筑後守則之の代になつて桐生国綱によつて滅ぼ
された。時に観応二年（二三五一）のことという。
天正五年（一五七七）、里見随見が上杉謙信を頼
つてこの地を領有することを請い、それを許され

た。さらに伊勢崎を加えられた。しかし、同年九月、新田氏（岩松氏）は（空字）由良国繁を遣わして要害山城を攻略させた。随見は自殺した。

※ **要害山、属高津戸**……この漢文部分は、聞き書きか、何かを書き写したのか、原典が分からない。事実でないことが多い。

※ **要害山** 前号参照。

※ **高津戸** 前号参照。

※ **堀河院** 堀河天皇。一〇七九—一一〇七。在位一〇八六—一一〇七。白河天皇の皇子。堀河天皇の踐祚後も白河上皇が院中に政を聴いたので、それをもって院政の開始とするのが普通。死後、堀河院と追号。

※ **御宇** 御代。時代。

※ **山田七郎平吉之** 寛治年間（一一〇八—一一一四）に要害山に初めて城を築いた武将といわれるが、同時代史料にはその名は登場しない。

※ **孫「孫」**では年代が合わないから、「子孫」という意味。

※ **築（筑）後守則之** 不詳。

※ **桐生国綱** 生没年不詳。観応元年（一二三〇）桐生の町の西北檜杓山に桐生城を築城したといわれる。桐生氏は、鎌倉時代初期に『吾妻鏡』などに「桐生六郎」の名が見えるが、関係は不明。天正元年（一五七三）、桐生氏は新田金山城主由良成繁に滅ぼされ、その子国繁の時、桐生城は由良氏の本城となった。

※ **寛（観）応二年** 一三五一年。足利尊氏の執事高師直と尊氏の弟直義の争いから尊氏・直義兄弟の争いに発展し、武将たちが双方に分か

れて激しく戦った観応の擾乱（一二三〇—一二三二）の最中。東国でも戦闘が行われたから、要害山城でも何かあったかもしれない。

※ **里見随見** 天正年間に要害山に築城したが、由良国繁に攻められ切腹したといわれる。しかし、同時代史料はない。

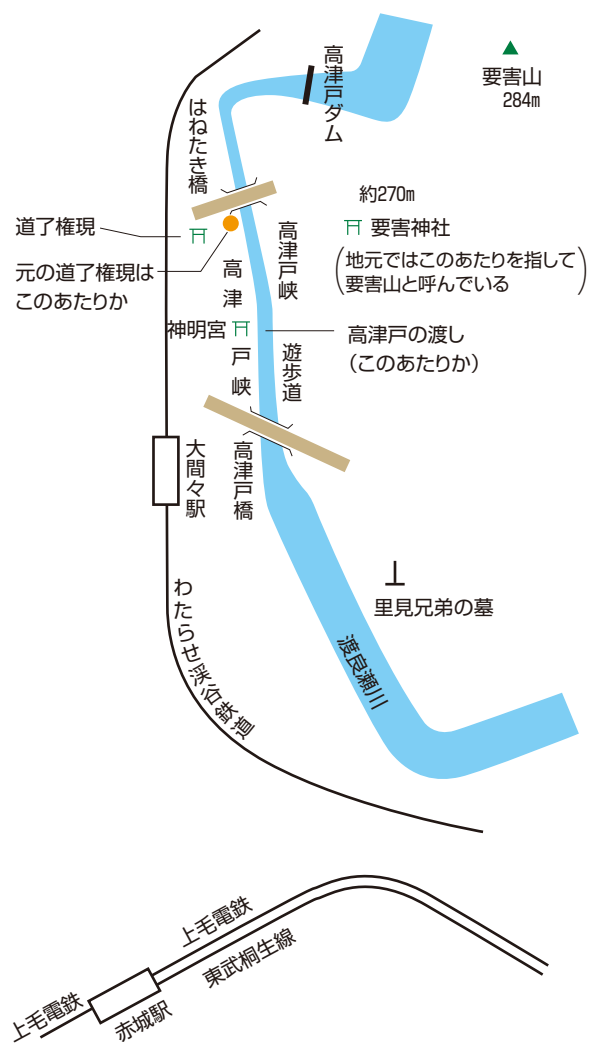
※ **上杉謙信** 一五三〇—一五七八。戦国時代の武将、越後国の大名。越後守護代長尾為景の末子、長尾景虎。兄晴景に代わって越後に亡命した上杉憲政から上杉家の家督と関東管領職を伝えられた。

※ **伊勢崎** 上野国佐位郡のうち（群馬県伊勢崎市）。古くは赤石郷といい、城砦を赤石城といった。天正年間以前から岩松氏・由良氏の支

配が及んでいた。里見随見に与えられたという史料は見当たらない。江戸時代は城下町。伊勢崎藩領の時期と前橋藩領の時期であった。

※ **新田** 岩松氏。新田の金山城に拠って東上州を支配下に入れたが、家宰横瀬氏（のちに由良氏と改称）に次第に実権を奪われ、当時はただ虚位を保つだけになっていた。由良氏を指揮する力はなかった。第三回（26号）に登場した新田万次郎の先祖である。

※ **由良国繁** 一五五〇—一六一一。天正五年（一五七七）はまた父成繁が家督であった。後北条上杉・武田氏の三つ巴の争覇の中に、父とともに金山城に拠って新田領の支配を維持した。翌天正六年、父の死後家督を継ぎ、実弟の館林城主長尾顕長と同盟して上野東部に一大勢



高津戸峡付近略図

力を形成した。同十三年（一五八五）、後北条氏に降伏し、金山城を明け渡し、桐生に退去した。高津戸も任せ置かれた。

山下に里見十二騎の墓ありといふ。日暮にちかく行かず。

山下に里見十二騎の墓があるという。日暮れが近いので行かなかつた。

※ **里見十二騎の墓** 高津戸の阿弥陀堂脇の墓地に三十数基分の五輪塔があり、「山田氏及び里見兄弟の墓」として、みどり市指定史跡になっている。しかし、みどり市の説明（インターネット）によれば、里見兄弟の墓と称される五輪塔には「逆修 天正六季 随見」などと刻まれているが、これらの五輪塔は凝灰岩製であり、形式的には鎌倉時代から南北朝時代にかけたのものであり、時代が一致しないという。

山間木葉をふみてくだれば、有^レ渡、（空字）といふ。川の真中に綱引わたし、此繩をかちとなして棹をもちひず。これ又渡瀬川なり。左様より巖聳て、上はたゞ松くらきばかりに生ひしげり、中に霜葉の打まじりたる、いとあはれなり。

山の中を木の葉を踏んで下ると、渡しがあり、（空字）という。川の真ん中に綱を引き渡し、この繩を舵として棹を用いず（に進む）。この川もまた渡良瀬川である。左側から岩石がそびえてい

て、上はただ松が暗くなるほどに生い茂り、その中に霜で紅葉した葉が混ざった様子は、たいへんしみじみとした情趣がある。

※ **有^レ渡** 川を渡ったと書いてはないが、以下に対岸の間々々の記述が来るので、ここで渡ったはずである。

※ **霜葉** 霜のために黄色や赤色になった葉。

高津戸の渡し

渡辺華山「毛武遊記図巻」より



又此川にそひて行、神明の古祠あり。これなん此わたりの生土神といふ。即此わたりは大間々としてむかしは村なりけるを、今は人家稠密になりて機織をもはらとす。月六たび絹糸の市をなし、遠き村々よりも入りつどひて、終に上にも村とハ称サズして町とハ申せしとぞ。街凡十町あまり、家六七百戸にあまりぬらん。これも又酒井大学頭殿の領地なり。

またこの川に沿って行くと、神明の古い祠がある。これはこのあたりの土地の守り神であるという。即ちこのあたりは大間々といつて、昔は村であったのであるが、今は人家が多数混み合っている機織業をもつぱらとしている。月に六回、絹糸の市を開き、遠い村々からも人々が入り集まるようになって、終に幕府でも村とは言わないで町と言うようになったという。街はおよそ十町（約一〇九〇m）あまり、人家は六、七百戸以上あるであろう。ここもまた酒井大学頭殿の領地である。

※ **神明** 大間々神明宮。

※ **生土神** 産土神（うぶすながみ）。近世以降は氏神や鎮守の神と混同されるようになった。

※ **稠密** 多数で混み合っている。

※ **月六たび** 慶長年間（一五九六—一六一五）より四、八の六斎市（雑市）が開かれ、絹糸が繁昌した。

※ **上** 身分の高い人をいう。ここでは幕府をさす。文政十一年（一八二八）、大間々村を寄場とする山田郡十一か村の御改革組合村が結成され、

同時に関東取締出役により、大間々町の呼称が認められた。

※ **家六七百戸** 文政十一年（一八二八）には村の戸数六八九戸、うち三九八戸が何らかの農業外の仕事を持っていたという。明治初期には戸数五九二と減っている。六七百戸というのは農家を含めた総数であり、街だけではそんなにはない。

※ **酒井大学頭** 出羽松山藩主酒井忠方。飛び地で桐生新町とともに大間々も支配していた。第七回（30号）参照。

高津戸峡（はね滝か）
渡辺華山「毛武遊記図巻」より



此祠の街を去る凡三四町、社後巖をとり木の根につきて溪に下れば、はね瀧といふ。又渡瀬川の上流にて水石せかれて瀑をなす。よりてかくは呼るなるべし。夏の程ハ香魚下流より登り、このたきを越んとし飛あがるを、石に坐て網をさし出せばあやまつて其中落るを取る。一時数百尾、まことに愉快なる事とぞ。

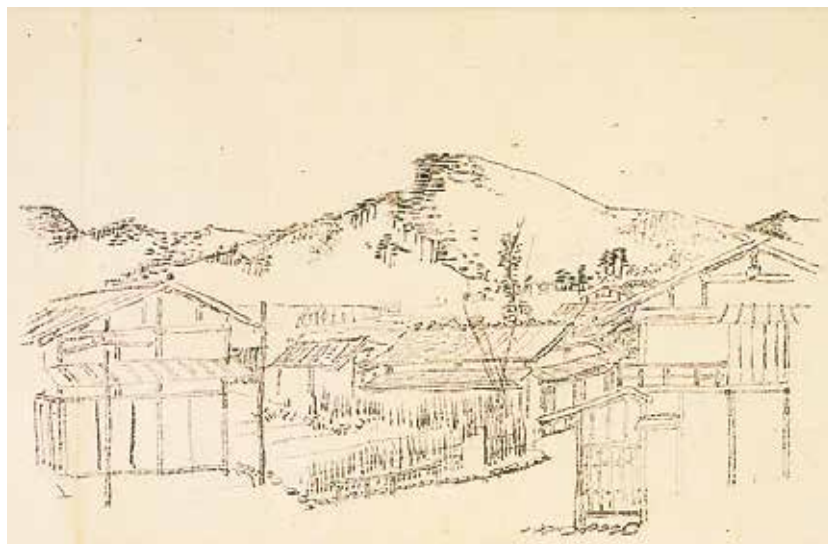
この（神明の）祠のある街を去つておよそ二、四町（約三二七―四三六m）、社の後ろの岩石につかまり木の根をたどつて溪谷を下りると、はね滝という所に出る。これもまた渡良瀬川の上流であつて、水が岩にさえぎられて滝となつてゐる。そこでこのように呼ばれるのである。夏の間は鮎が下流から上つてきて、この滝を越そうとして飛び上がるところを、石に座つて網を差し出してやると、誤つてその中へ落ちるのを捕まえる。一度に数百尾も取れて、まことに愉快なことであるといふ。

※ **はね滝** 渡良瀬川の高津戸峡（みどり市大間々町高津戸・大間々の間）。高津戸峡の峡谷美の中心といわれたが、すぐ上流に高津戸ダムができて昔の景観は失われた。歩行者専用のはねたき橋が架けられている。

※ **せかれて** さえぎられて。
※ **香魚** 体全体、特に体表をおおっている粘膜に良い香りがあるとところから、こう呼ばれる。鮎の美称。

山麓の街道に建つ人家（左記図書によれば、桐生から要害山へ行く途中の川内付近）

渡辺華山「毛武遊記図巻」より



追記

『毛武遊記』に沿つて華山と歩く桐生と周辺の旅『渡辺華山と歩く会（岡田幸夫代表）発行 平成二十五年。新たに発行されました。現地調査がしっかりなされているので、教えられること大です。

（続）

田原市博物館所蔵品から

渡辺崋山筆『客坐掌記(天保九年)』◎



(図) 町並

(図) 町並



戊申春日写為

菰亭老長兄清鑒

* 蔣賜榮

(圖 山水)

* 寒山蕭寺

* 倣李營丘筆

* 天啓乙丑中秋前二日 関思

(圖 山水)

蔣賜榮 生没年等未確認。『清史稿』には乾隆帝(二七三五一九五)末年から嘉慶帝(二七九六一一八二〇)初年に戸部侍郎を務めていた人物として名が見える。

寒山蕭寺 南朝梁の蕭衍(武帝)により、天監年間(五〇二―五一九)創建された、妙利普明塔院の通称、蘇州(江蘇)城外楓橋鎮、唐の僧・希遷が寒山寺と号した。

李營丘 李成(九一九―九六七)字咸熙、号營丘、山東營丘人、世業儒、善属文、磊落有大志、因才命不遇、放意詩酒、寓興於画。(中・358)

天啓乙丑中秋前二日 天啓五(一六二五)年八月十四日

関思 明、烏程人、字何思、号虚白、善画山水、骨法气韻入二季、三王之微、疑王蒙。(中・1514)



(図 山水)

(図 女人と鶴)



洪谷子一派、惟雲林能繼之、後世竟成絕響、以其生疎日遠也、大坤

(圖 山水)

(圖 山水)

洪谷子 荆浩、五代・後梁、字浩然、隱於太行山之洪谷、因号洪谷子、河南沁水(濟源東北)人、博通經史、善属文、工画佛像、尤妙画山水。(中:754)

雲林 倪瓚(三〇一~三七四)、字元鎮、号雲林、自称倪迂、無錫(江蘇無錫)人、工画山水。

(中:656)

疎 よく知っていない。

大坤 翟大坤(?~一八〇四)、字子厚(厚)、号雲屏、無聞子、本籍浙江嘉興、寄居吳門(江蘇蘇州)、性蕭散好書、画、間作墨竹巨幅、亦絶妙、乾隆三七年作秋林曳杖扇。(中:1261)

平成二十五年度華山・史学研究会研修視察
毛武桐生の華山の足跡をたどる

平成二十五年度華山・史学研究会研修視察は、十一月二十三、二十四日、土日曜日にかけての二泊二日で行われました。今回は、天保二年（一八三二）十月（旧暦ですので、現在では、ちょうど十一月ころにあたります）の旅の記録である『毛武遊記』の足跡をたどる旅です。華山の妹、茂登の嫁ぎ先である群馬県桐生が目的地です。桐生の嫁ぎ先である岩本家は、桐生織物の買継商で江戸の大名屋敷を廻っていました。『華山会報』でも『毛武遊記』連載中であり、研究会としても久しぶりの桐生訪問となりました。

当日、午前八時三十分 豊橋駅に集合した会員は、石川洋一・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌の四名でした。豊橋駅を八時四十三分の新幹線ひかり号で出発し、品川から北千住を経て、東武特急りょうもう号で新桐生へ移動、駅前で桐生華山会の山鹿英助氏と華山と歩く会代表の岡田幸夫氏と合流し、桐生新町重要伝統的建造物群保存地区の中にあり、桐生市の商業に大きく寄与してきた矢野本店の蔵群である有鄰館で昼食を取りました。矢野本店・有鄰館（当時の屋号は近江屋）は桐生

市本町二丁目にあり、建物はいずれも桐生市指定文化財です。また、矢野本店の本町通りから裏通りへ東西に走る細い路地をはさんだ向かい側は、茂登が嫁いだ岩本家の屋敷があった場所です。この屋敷に二十日以上滞在していたと思うと感慨深いものがあります。その週は、有鄰館でイベントも開催され、昼食時間には八木節も聞こえていました。代々の当主の専用の部屋である矢野園の二階の座敷に上がらせてもらいました。年に一度、店の棚卸しと会計監査を兼ねて、近江国から当主が訪れ、店を仕切る番頭さんから報告を受けた部屋だそうです。階段を上った手前の部屋

には、幕末の近江屋周辺を俯瞰的に描いた「四阿街況」という大きな横長の掛軸が掛けられています。昼食は華山が天保二年十月の旅の途次、足利の宿で取った食事メニューを再現したものです。「華山御膳」と名づけられ、合歡豆腐・精進鮑・松魚（鯉ナマリ）の煮付け）・漬物・葉わさび・味噌汁・ごはん、デザートに抹茶のわらび餅・御抹茶が つきます。



昼食後、岩本茂兵衛・茂登夫妻の墓所がある観音院を訪ねました。「渡辺華山妹茂登墓所」の石柱があり、岩本家一族のお墓を確認し、本堂では月門快憲住職の御好意により、茂登の息子、一僊が両親の供養のために描いた「涅槃図」と「羅漢図」を鑑賞させていただきました。読売新聞・上毛新聞・桐生タイムスの取材も受けました。

次は車で移動し、桐生新町の起点として一五九一年に整備された桐生天満宮を訪ね、前年に建立されたばかりの「渡辺華山 毛武遊記の碑」を見学しました。天満宮の社殿は、華山が生まれた年と同じ一七九三年に落成したもので、当時の建築装飾技術の粋を集めた建造物として、群馬県の重要文化財に指定されています。

華山の足跡に準じ、光明寺横を通り、吾妻公園駐車場を経由して、桐生の町並みを見下ろすことのできる水道山公園（雷電山）に上ります。展望デッキも整備され、そこに登ると華山が見た当時よりも成長した木々越しに桐生の全景を見ることが出来ます。およそ百八十年前に『毛武遊記図巻』（常葉美術館蔵）に描かれた景色を実体験できました。さらに西へ移動し、赤岩の渡しを見下ろすことのできる場所を案内いただきました。上毛電鉄上毛線の電車が渡良瀬川上の鉄橋を渡って行く光景と見下ろすことのできる小さな富士山を

見て、小倉峠へ通じる切通しに徒歩で少し入りま
した。夕刻も近づいてきましたので、桐生駅に戻
り、桐生市民活動推進センター「ゆい」で場所を
お借りし、翌日の作戦会議を立てます。桐生駅近
くのホテルにチ
ェックイン。暗
くなってから、
毎年の視察で同
じパターンです
が、食事所（ア
ルコールあり）
へ向かったので
した。



第二日目は、
桐生駅からわた
らせ渓谷鉄道一
両編成の車両に
乗車して大間々駅（みどり市）へ向かいます。晴
天に恵まれ、紅葉目当てのハイキング姿の一行も
同乗していました。妹婿である岩本茂兵衛が案内
してくれた要害山・高津戸を訪ねます。大間々駅
で前日に引き続き、華山と歩く会代表の岡田幸夫
氏と合流します。大間々駅は昭和十六年の建設で、
登録有形文化財です。まず、神明宮を参拝し、渡
良瀬川第一の景勝地であり、「関東の耶馬溪」と

称される高津戸峡（5ページに略図があります）
では、華山も対岸に張った綱をたぐりながら渡る
高津戸の渡しやはね滝を描いています。さらに道
了権現社をめぐり、いよいよ川沿いの渓谷に降り、
遊歩道を歩きます。渓谷は昇り降りもあり、時間
はかかりますが、紅葉の中、多くの人達が川べり
まであふれています。私達一行も華山先生の気分
を味わおうと意を決して歩き始めました。遊歩道
は平成八年に完成したもので、約四百五十メート
ルあり、このあたり一帯の高津戸峡は別名「なが
め」と呼ばれ、道路反対側には昭和初期に建設さ
れた「ながめ余興場」があり、公園内では第五十
六回関東菊花大会を開催中でした。ながめ余興場
の飯塚館長代理に余興場の地下展示場を特別に案
内していただきました。続いて、ながめを見下ろ
す要害山頂へ岡田氏に送迎していただきました。

車で行ける展望台からは大間々の町が見渡せまし
た。徒歩で上がった山頂には、要害山神社があり、
金比羅宮として祀られています。社殿前には、神
社と高津戸城の由来が説明してある看板、社殿横
には佐羽淡齋の別荘「十山亭」のあった小倉山か
ら運んだとされる石碑も設置されています。最近
では山頂付近に猪が出没し、餌を探すためにあち
こちに穴が開いています。田原市にも猪被害があ
り、人がいるところにもいるようです。遠くには

赤城山が見られ
ます。

大間々駅で岡
田さんと別れ、
昼食を取り、そ
の後、大間々の
街中にある醤油
醸造業岡直三郎
商店を訪ね、天
明七年（一七八
七）以来続いて
いる木桶仕込み
の天然醸造蔵を
見学し、「には
んいち醤油」を
楽しみ、コノド
ント館ことみど
り市大間々博物
館を見学、徒歩
で東武桐生線赤
城駅まで行き、
帰路へと向か
いました。



今回の旅では、平成二十五年十月に出版された
ばかりの『毛武游記』に沿って華山と歩く桐生
と周辺の旅―江戸から桐生・みどり・足利・太田
を往く』と『華山と歩く桐生と周辺の旅』を事前
に入手できましたので、視察の参考とさせていた
だきました。この二つの資料は田原市博物館でも
購入できます。

研究会員 鈴木利昌

華山の田原行(十六)

二月一九日(続)

前回は、康直がかつて側女探しで百六十名召し出させたこと、そのうち召し抱えたのが二人だったこと、そして、すぐに二人に暇をだしたこと、それが華山には御暴政に映ったことを述べました。ここで、華山が批判しているのは、康直の側女探しではなく、財政難の田原藩で藩主にも関わらず康直が行った無駄についてです。

「川澄又二、鈴木弥太来、これハかねて森田文左エ門へ仰せて御妾を名古屋にて撰んとの事なり。」
本稿第十四回で述べたように、国家老の川澄又二郎と鈴木弥太夫が華山を訪れます。要件は、康直が田原での無聊を慰めるために森田文左エ門へ命じた名古屋から側女探しについてです。
今回の側女探しについては、「文左衛門も又たゞならぬ御仰なれば、いかにしてか絵にかけるがごときものと思ひ定しかば、いよいよ其人なくて、徒にかえらんと申こせしなり。」と、康直の好みにあつた側女を探させるのですが、該当する女性

『全樂堂日録』天保四年二月十九日



が見つからなかった、という結果に終わります。「されバ上へはいよいよ御我ま、御つりのりありて、たゞ病つりのり御いたづきにもならせ玉ハんと川澄、鈴木などそれをのミ心苦しく思ふ。上にハ又日を期など仰出されて其期まで美人なれば命ぜし様のとゞかぬなど仰あり。川澄ハ持病ある人にて胸くるしうねがちにて、任にもたえぬ斗にハなれり。」
康直は、さらに我が儘になり、川澄たちは、このままでは康直が病気になるいかと心配します。しかし、康直は、期日を区切るなど要求を強

めます。康直からのストレスのため、持病のある川澄は、仕事ができないありさまになってしまいます。

このような相談を受けた華山は、その日の夜のうちに、康直に諫言します。

「さすればとて御家の安危にかゝる事なれば、此夜御前に出てこのあらし申上、猶御敷敷御撰ハなくて、たゞ三味線を善せんもの老人、色あるもの老人、御枕席の御伽ハまづ此度ハ御ゆる玉ハらん事を願、御けしきよし。」

二月一日の項(本会報二十一号)に、「君上御思召出るまゝを仰られて、可否を申あぐべきと御沙汰ある。一は御奏者番御内願之事、二は御妾之事、第二は御即答に申上たれど、」とあるように、側女についての華山なりの意見を述べたことはあります。奏者番就任についての華山の諫言は、本稿でも紹介してきましたが、側女についての諫言は、この時が初めてと思われる。二月一日に華山が何を言ったかは不明ですが、藩の経済状況を理由に、今はその時期でないことを述べたのではないのでしょうか。

中国では、諫言をする官吏を設置する諫官制度を取り入れる王朝が多く、諫官が皇帝の誤りを問い詰めることができるようになっていました。これは、『礼記』にある、君主が無道である場合、

三度諫めても聞き入れられない場合は、家臣は君臣関係を解消して立ち去ればよい、という「君臣義合」の思想からきています。

しかし、日本、特に江戸時代には、君主の元を去ることは、脱藩になってしまうのでよろしくありません。かといって、易姓革命¹有徳な者が無道な暴君や暗君を追放するということは日本の場合、謀反となり、これもよろしくありません。結局、日本では諫官を政治体制に組織化することができず、諫言が必要な場合は、家老などの一部の上層家臣のみ諫言を行うことができました。そし



『全楽堂日録』天保三年二月六日

て、諫言の効果が無い場合は、「主君押込」という家老たちが主君を押し込める行為が正当化されていた。ていきました。

儒教の原則として、「君臣義合」とともに、「父子天合」があります。前出の『礼記』では、父が無道の場合、三度諫めても聞き入れられなければ、子は、大声で泣き叫びながらも父の行動に従わなければならぬとされています。つまり、天合である家父長制原理²孝が、義合である主従制原理³忠に優先されています。江戸時代に山崎闇斎、山鹿素行ら多くの儒者が、忠と孝の関係が考えられてきました。

そんななかで、「君臣義合」の考えは、陽明学の台頭や朱子学の発展により義合から天合へと変容していきます。華山の師である佐藤一斎に至っては、君臣義合を完全に否定し、君臣関係を先天的な職と禄による結合とし、義に天合的な意味を持たせました。

華山も「領中之もの我等を殿さまとのミ心得居り候は不宜候。殿さまとハ天子より重き位を被下、公儀より大なる所領を被下、万人之上に居広き城内に住居候故、夫を仰ぎて下より称候名目にて、我等が心に取て実は領中之もの共之父母にて候。然上は役人共は領中之もの共之兄にて候処、領中之ものハ唯尊き殿さま重き役人とのミ心得、かり

そめにも実の父母まことの兄と弁へざるハ我等が心とハ相違いたし候。以来共我等を親、役人共を兄と力ニ思ひ可申候。」（「領中触文」天保七年二月七日）と、藩主や藩士と領民との関係を家族に例えている記述を見ると、一斎の思想の影響を受け、君臣関係について天合的に考えていると思われるところがあります。

諫言については、真木定前への書簡に「君私心あるも臣たる者何唯従せんや。若後に君発議の心生たる時、忽に事を遂ぐるまでに謀をく、これ臣の道也」（天保二年九月一四日）とあるように家臣として当然の行為と考えています。書簡での康直への意見の具申は、たびたびありましたが、川澄たちから相談を受けた時、年寄役であったので、奏者番就任についての諫言同様、対面しての諫言を行います。

華山の「三味線を善せんもの壱人、色あるもの壱人、御枕席の御伽ハまづ此度ハ御ゆる玉ハらん事」という提案を聞いた康直は、「御けしきよし」とありますので、機嫌をよくし、納得したようです。

康直への批判を述べる華山ですが、諫言を受け入れる康直の藩主としての度量の広さは認めています。たようです。

公益財団法人華山会
田原市博物館
田原市渥美郷土資料館
からのご案内

田原市博物館企画展のご案内

四月二十二日(土)～五月二十五日(日)
春の企画展 田原の美術と森緑翠とその仲間展
(企画展示室一・二)
近年寄贈された森緑翠作品と中村正義や浅田蘇泉をはじめとする白土会創立当時の仲間たちの作品も合わせて展示します。渥美郷土資料館でも開催。



森緑翠画「鞍馬寺献燈」

昭和51年 田原市博物館蔵
ギャラリートーク(講師は元白土会委員道家珍彦氏) 四月二十六日(土) 田原市博物館
午後一時三十分
展示解説(講師は当館学芸員)
四月二十六日(土) 田原市博物館・五月十七日(土) 渥美郷土資料館
午前十一時
同時開催…華椿系の花鳥画(特別展示室)

七月十九日(土)～八月三十一日(日)

夏の企画展 東三河のジオパーク
(企画展示室一)
渥美半島を含む東三河地域には多くの自然遺産、歴史文化遺産があります。東三河の自然遺産はもろろ渥美半島の自然にはぐくまれた「貝塚」「製塩遺跡」「渥美窯」などの文化遺産も紹介します。本展は夏休み企画です。小学生の自由研究などにご活用ください。

同時開催…渡辺華山の師(特別展示室)
金子金陵・谷文晁は華山の師です。
愛知県美術館サテライト展示
(企画展示室二)
民俗教室
八月月上旬 小学生対象
詳細はチラシ等でお知らせします。

十月二十五日(土)～十二月七日(日)
渥美郷土資料館企画展
生誕250年 糟谷磯丸展 まじない歌の世界(企画展示室)
講演会・展示解説
詳細はチラシ等でお知らせします。

平常展のご案内

五月三十一日(土)～七月十三日(日)
文人画家が描く春夏
(特別展示室) 華山・白井烟岳など
新収蔵品展
(企画展示室二) 華山も展示
浮世絵と風景を描く
(企画展示室二) 東海道五十三次など

九月六日(土)～十月十九日(日)

田原の美術と描かれた田原(特別展示室)
華椿系の流れ(企画展示室)

十月二十五日(土)～十一月三十日(日)
渡辺華山名品展(特別展示室)
郷土の先人華山・磯丸(企画展示室一)
田原藩(企画展示室二)

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。
民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。田原市博物館開館中の金土日曜日と祝日が閉館日です。
渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料
企画展 一般 四〇〇円(三三〇円)
平常時 一般 二二〇円(二六〇円)
小・中学生 一〇〇円(八〇円)
(一)内は二十人以上の団体料金
東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日
(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中
申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中
入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。
博物館たより・華山会報をお送りします。

華山会報 第三十二号

平成二十六年四月十一日発行
編集発行 公益財団法人華山会
理事長 鈴木 愿
常務理事 菰田稀一
事務局長 讃岐俊宣

〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江二二の一
TEL〇五三二・二二二・一七〇〇
FAX〇五三二・二二二・一七〇一

編集協力
田原市博物館
華山・史学研究会

会長 山田哲夫
吉川利明 林 和彦
別所興一 加藤克己
石川洋一 小林一弘
林 哲志 中村正子
小川金一 柴田雅芳
中神昌秀 増山禎之
磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 平成二十六年十一月一日